

『クーチマー』

作者 浅羽一

昔、家の近くの公園に奇妙な奴がいた。

そこは俺の住んでいたアパートから子供の足で徒歩三分くらいの距離にあり、住宅街のやや外れに位置する人気のあまりない公園は周囲を木に囲まれているせいもあって例えば学校へ行きたくない子供が隠れて時間を潰すには格好の場所だった。そしてまだ小学校の四年生だった俺は、夏休みが明けると同時に新しい学校へ通い出してから早くも三日目には制服姿でそこへ隠れるようになっていた。

田舎にありがちな余所者を許容しない地域だったとか、もっと単純に転校早々いじめられたとか、そういうことは全くなかった。むしろ男女問わず積極的に話し掛けてくれ、休み時間には運動場で遊ぶものだからと誘ってくれ、気の良い連中ばかりだったと今にして思えば分かる。けれど当時の俺にとっては逆にそんな彼らの態度が馴れ馴れしく感じられて、また同時にどうせ他の人間と僕は違うからみたいに冷めた考え方をしている、要するに上手く馴染めなかった。

良くも悪くも俺にとって都合の良かったことが、夏休み中にいきなり引越してきた原因でもあったのだが両親の離婚により母親と二人暮らしになっていたことだった。しかも、あの頃は知る由もなかったが別れた父親からの養育費が満足に振り込まれず、そのせいもあり母親は朝早くから夜までずっと働きに出ていた。

子供を不安にさせまいと愚痴や不満なんて一言も漏らさず、ほんの少し前まで専業主婦だった身でありながら一所懸命に仕事をして、紛れもなく良い母親だった：と言うと故人みたいに聞こえてしまうが、事実としてそうだったのだから仕方ない。だが、未熟な俺にそんな母親の苦労や有り難みまで思い量る賢さはなく、朝目覚めるとテーブルに用意されている朝食を見ては、こっちに来たばかりの頃せめて朝くらいは一緒に食べようと約束したのはそっちだったくせにと、ぶつける相手のいない苛立ちを募らせていた。

朝食に添えて用意されていた昼食は給食があるからと学校の開始と共に同時になくなっていた。だから朝食を食べ終えた俺はいつも炊飯器に残っていたご飯を丸めておにぎりを作り、それを持って公園へ出掛けていた。

冷静に考えれば分かる話だが、小柄な子供の食べる量なんて、ましてや我が子の普段の食事量なんて、まともに家事をしている母親なら大抵の場合はある程度の予想が付く。だとすれば、毎夜ほとんど空になった炊飯器を見ては仕事帰りにも関わらず米を研いで炊く母親にとって、俺の行動なんておそろくほとんどお見通しのはずだった。いや、そもそも無断欠席を続ける児童に対して、いくら携帯電話やパソコンなどが無い時代であったとは言え、学校側が何の連絡や対策もしないはずがないのだ。だとすれば、丸一日、確かに着られていた制服を洗濯機の中に眺めながら、まともに学校へ通っていない息子に対して当時の母親はどんな想いを抱いていたのだろう。愚かな子供と呆れていたのか、それとも不遇な環境に置いてしまっていると罪悪感を抱いていたのか、或いは単にストレスの一回でしかなかったのか。いずれにせよ、俺としては何もバレていないつもりだったのだから、全くもってガキだとしか言いようがない。

しかしながら、そんなガキだったからこそ本人だけは気楽であったのも確かで、実を言うとうと悪いことをしている自覚は少なからずあったもののそれ以上にちよつと刺激的なゲーム感覚であったことは否めない。大人に見つかったら負け、そんな逃亡犯気分朝から夕方まで誰も訪れずさして広くもない公園で一人きり。我ながら暗い子供だったと呆れるが、

それでもあの頃の俺にとってきちんと学校へ通う億劫さに比べればそこは遙かに快適な場所だった。

公園内にあった遊具と言えば、つんと鉄の匂いのする鉄棒に、鎖を握った手に色が移るブランコ、落下の衝撃が直に尻へ伝わるシーソー、それから赤色の金属の棒で作った網状の球体を地面の軸に固定して回転させて遊ぶ子供達の間で「地球儀」と呼ばれていたもの、最後に水色のペンキのはげたベンチが一つ。そして特にお気に入りには地球儀で、俺はいつも内部が座れるようになっていてその中で持参したおにぎりを食べるのがお決まりになっていた。

単なる白飯はどうして塩をまぶして軽く握るだけで美味しくなったように感じるのか。おかずもお茶もなく、あるのはラップでくるまれた自作のおにぎり、公園の隅っこにあった水道の蛇口から出てくる生温い水だけ。そんな昼食にも関わらず、不思議と不満を覚えて記憶はない。

そしてあの日もいつも通り、教科書なんてろくに入れ替えもしないランドセルの隙間から微妙にひしゃげた大きめのおにぎりを取り出し、とりあえずそれをベンチの上に置いて先に水道で手を洗っていた。変化は、その直後にあった。

母親から常に持ち歩くように言われていたハンカチを使いもせず、シャツの裾で手を拭きながらベンチを振り返った俺は、ぎよつとして立ち止まった。ベンチの前でこちらに背を向けるように、と言うよりもつと正確に言えば俺のおにぎりをまじまじと覗き込むように、いつの間にも現れたのか真っ赤な麦わら帽子に群青色の甚兵衛なんて格好の子供がそこにいた。

見つかって、何よりもまずそう思った。逃げなくちゃ、続いてそう考えた。だけど荷物 of 全てはそいつの向こう側にあり、結局、俺は立ち尽くした。

「これ、お前のか」

そいつがぼつと振り返って言うてきたのは、それから数秒ほど経った時だった。

「なあ、これ、お前のか」

そいつは再びそう言った。でも、こっちはもうそれどころじゃなくて、そもそも一体何に対して言われているのかさえ理解していなかった。

するとそいつは少しばかり苛ついた風に、ざつざつと地面を靴で蹴り、「何とか言えよ」とひよろりとした姿を目一杯に大きく見せるような歩き方でこちらへ近付いてきた。あの時、どうしてもそう思ったのか分からないけれど、まるで見慣れない格好に加えてもう可哀想になるくらいぼろぼろの運動靴が、ああ殴られるんだと言う未来を想像させてきた。

いよいよそいつが目の前にやってきた。もう荷物がどうか何て関係なかった。それでも逃げ出さなかったのは単に膝が震えていたからだ。そしてそいつはぼつと右手を上げた。

「これ、お前のだろ」

え、と一瞬、何が起こっているのか理解出来なかった。あまりと言えば滑稽な状況に恐怖と一緒に言葉も忘れてしまった。そいつの右手には俺の持つてきたおにぎりが握られていた。

「おい」と詰め寄ってきたそいつの表情が、睨んでいたのではなく、実は困っていたが故だったと分かったのはずいぶんと後になってからだ。

やっと我に返れたのは、もう一度「これ、お前のだろ」と聞かれた上に、さらにおにぎ

りを顔に当たりそうなくらい近付けられてからだった。

果たして、あの時の自分は何と答えたのだろうか。おそらく「ああ」とか「うん」とかそんな呟き程度のものだったのだろうが、それでも直後に彼の浮かべた表情は今でも覚えている。唇の両端を一杯に持ち上げておにぎりみたいに白い歯を剥き出しにして、そのくせ両目は糸さながらに細くして、彼は「いししし」と変わった笑い声を上げた。真っ黒に日焼けした肌に、真っ赤に染められた麦わら真田と甚兵衛の群青色がとても綺麗に映えていた。

「美味そうだな」

それは、もしも数瞬前に台詞だけを告げられていけば下手くそなカツアゲじみて聞こえていただろう。けど心から素直に言っているのだと分かる声は、ただそれだけで彼が恐ろしい相手ではない―変わってはいるかも知れないが―と感じさせた。

「あの、もし良かったら」と、気付けば俺は言っていた。

「良いのかっ」

そいつは最後まで俺の言葉を待とうとせず、そう言っただけで目を輝かせるやいなやその場でラップを向いておにぎりにかぶりついた。

俺がいつも小さくかじるように何口も使って食べていたおにぎりは、たった一口でおよそ半分が無くなった。そしてそいつは顎だけでなく顔全体を総動員させて咀嚼し、やがて漫画のようにごくんと飲み込んだ。その様子を啞然と見ていた俺は、もの凄く近い距離で上下する喉を目にしてようやく堪えきれなくなっただけで笑った。

「これ、美味しいなあ」

その一言で、思わず笑みが止まった。自分でも信じられないくらいどきどきとした。かつて両親に卵焼きを作ったおにぎりを右手で掴んで左手でばんばんと肩を叩いてくるそいつに、それも悪口でないことを言われて泣きそうになるなんて、生まれて初めての経験だった。

「こんなにも美味しい握り飯食ったの、久しぶりだ。お前の母ちゃん、すげーなあ」

「あ、あの、それ、僕が作ったんだ」

「本当か？なら、お前すげーなあ」

「…あ、いや、そうでもないけど」なんて返したこちらの声を聞いているのかいないのか、半分になったおにぎりを右手で掴んで左手でばんばんと肩を叩いてくるそいつに、本当はちよつと痛かったものの、俺は「良かったら、全部食べて良いよ」と言った。勿論、あいつが遠慮なんかするわけなかった。

あつという間に残りを残りを平らげて、それから躊躇無く水道の蛇口をくわえて生水をごくごくぐりと飲んだ彼は、やがて大きなげっぷを一つしてから「ありがとな」と笑った。その様子があんまりにも豪快で、俺は何だかこっちまでお腹一杯になった気がした。

「なあ、もう無いのか？」

「あ、ごめん。一個しか作って来なかったから」

「そっか…」

他の人間が相手なら不躰な奴だと思ったかも知れないが、そいつに限ってはむしろこちらの方こそ申し訳ない気持ちになった。そしてそれ以上に嬉しくなった。だから、次の言葉は自然と出てきた。

「また、作って来ようか」

或いはおにぎりを食べて良いと言われた時よりも幸せそうな笑みを浮かべたそいつを見た途端、きつと作って来ようと決めた。この子供が誰だとか、どうしてこんな時間にこんな場所にいるんだとか、自分を棚に上げた考えなんてまるで気にならなかった。

「あれやろうぜ」

いきなりそう言い出したそいつの視線の先にあったものは、鉄棒でもブランコでもシーソーでもなくて地球儀だった。俺はこちらの返事も待たずに駆け出したそいつへ「ちよつと待って」と告げて蛇口の水で胃袋を膨らませてから、「早く早く」と急かす声に「ごめん」と答えてそこへと急いだ。

「良いか、思いつきりだぞ」

あいつはさつそく綱の中に入っていて、俺に外から回せと全身で大きく身振りしていた。俺はあいつが跳ねるたびにがしゃんがしゃんと鳴る地球儀の鉄棒を両手でしつかりと掴み、力一杯に地面を蹴った。

だけど、残念ながら、俺の運動神経ではあいつが満足するほどに速度を出すことは叶わなかった。我ながら情けない話だが、俺が押す地球儀はぐるぐると言うよりもよれよれと言った方がお似合いだった。

すると、それでもしばらくは中で「もつと」とか「速く」とか言っていたあいつは、けれど突然「もう良い」と怒鳴るところこちらが地球儀を停止させるのも待たずに飛び降りた。

俺は、失敗した、そう思った。同時に、きつと怒らせた、そう思った。

ただどあいっは、まるでひ弱な弟に対する腕白な兄貴めいた口調で「今度はお前が中な」と言った。そして半ば強制的に球体の内側へと入れられた俺がちゃんと体を固定したかどうかろくに確認もせず、「行くぞ」と一声上げたかと思ったらいきなり全力で回し始めた。

それはもう、凄かった。人生で初めて乗った遊園地のジェットコースター並の怖さで、慌てて鉄棒にしがみついた俺は反射的にぎゅつと目を閉じていた。体の中でさつき飲んだ水がお風呂の栓を抜いた時みたいに渦を巻いている感じがした。

「おい、ちゃんと見るよ」

そんな声が本当にすぐ近くで聞こえてきて、俺はやつと目を開けられた。思い切り走り続けているくせに息を切らずどころかけらけらと楽しそうに笑う顔が、四角い鉄棒を挟んで真正面にあつた。そして俺は見た。

あたかも額縁のような赤い地球儀の枠の向こう、あまりの勢いに世界の色や形がぐにやりと溶けて混じってしまった景色に於いて唯一、時折遠心力に任せて足を浮かせるあいつの笑い顔だけが変わらなかつた。

俺は笑った。もしかしたらあいつ以上に笑っていた。いくら住宅から多少の距離があるとは言え、大声を出したら大人に見つかるとも知れない恐れは十分にあつた。だけどそんなこと完全に頭から消えていた。ようやく地球儀が止まったのは、俺達よりも一足先に堪えきれなくなった麦わら帽子がいきなりあいつの頭から飛んでいった時だった。膝に手を付き大きく肩で息をしているあいつの為に、代わってそれを取ってこようと思ったものの、回転の余韻で落ち着かない視界のせいで満足に歩けず、結局、俺は入り口の縁に腰掛けるように足を下ろして何度も何度も大地の感触を確かめていた。

「良し、じゃあもう一回な」

そんな言葉に驚いて顔を上げると、あいつはとっくに元通りの格好になって再び地球儀

を握っていた。俺は情けなくも悲鳴を上げて中へ戻った。そんな俺を見たあいつは「お前はフ〜バ〜だなあ」と楽しそうに笑った。

正直、「フ〜バ〜」の意味はちんぷんかんぷんだったものの、そんなものに構っていない余裕はなかったし、やがて再び落ち着いて以降はもう気にならなくなっていった。それから何度か「お前はフ〜バ〜だなあ」と言われたが、それは決まってこっちが失敗したり向こうの期待に応えられなかったりした時だったから、勝手に「多分、馬鹿とか駄目とか間抜けとかって意味なんだろうな」と考えて納得していた。

改めて思い返してみても、お互いに「友達になろう」なんて言った記憶はない。それどころか自己紹介すらした覚えがない。ただ、ずっと公園の中で遊んでいて、やがて夕方になって、そろそろ帰らないといけないと伝えた時、再び「フ〜バ〜」と言われた声ははつきりと耳に残っている。それから「ごめん」と思わず謝ったこちらに、「また頼むな」と楽しそうに告げてきた声も。

「また明日も持つてくるから」

意識するよりも早く、俺はそう言っていた。するとあいつは心から嬉しそうに「約束だ」と言った。だから俺ももう一度「絶対に持つてくるから。約束」と返した。

翌日、俺は朝食の分のご飯までおにぎりにして、ついでに狭いアパートの部屋を家探しする勢いで漁って見つけたチョコレート菓子をランドセルに放り込んで公園へ行った。もしかしたら来ないかも知れない、そんな考えは無理矢理に頭から追い出していた。

あいつはなかなか現れなかった。午前中、俺はずっとブランコとベンチを行ったり来たりしていた。地球儀に乗るのはあいつが来てからにしようと思っていた。

太陽がそろそろ真上に来る頃になっても、あいつはまだ姿を見せなかった。俺はすでにランドセルからおにぎりを二つ、ベンチの上に並べて、じっと待っていた。

来ない方が当たり前だと、分かっているつもりだった。昨日はたまたま学校が休みか何かで、今日は普通に登校していると考えた方がむしろ自然だった。だけど、俺はそんな常識なんて何もかも追いやって、泣きそうになるのを必死に堪えて、「約束したんだから」と頭の中で繰り返し返していた。

「それ、美味そうだな」

だから、何の前触れもなくそんな声が聞こえてきた瞬間、俺は顔を上げると同時に泣きそうになった。丁度てっぺんに上った夏の太陽は、だけどあいつの麦わら帽子に遮られてきらきらと光の欠片のようにこちらへ注がれた。「二つ、くれんのか」。真っ赤な麦わら帽子に群青色の甚兵衛姿のあいつはこちらの気も知らずにそんなことを言ってきて、俺は泣く代わりに大きな声で「一個は僕のだよ」と返して笑った。あいつはあからさまに不満そうな顔をしたが、チョコレートを見せてやったら途端に幸せそうにほっぺたを甘くした。

俺たちは遊んだ。良くもまああんな狭い公園の中だけで、それもゲームやオモチャどころかボールの一つも使わず何時間もはしゃげたものだと関心を通り越していつそ呆れるが、それでも確かに俺たちは飽きもせず地球儀↓鉄棒↓ブランコ↓地球儀↓シーソー↓地球儀↓ブランコ↓地球儀と動き回った。途中、さすがに疲れてベンチにへたり込む俺に、あいつは決まって「フ〜バ〜」と言って笑った。でも、だからってこちらの疲れも無視して手を引くなんてことはせず、それよりもこっちがベンチに座っている間中ひたすら変な顔をしたり奇妙な踊りを踊っては笑わせてきた。ある意味、疲弊した心肺と痛む横腹にとっ

てはそっちの方こそ辛かったりもしたのだけれど、それでも俺はけらけらと笑って、制服が砂まみれになるのも構わずベンチと言わず遊具と言わず何なら地面の上で転げ回った。

二回目の約束はしなかった。だけど俺はまた明日もおにぎりを二つ、作って来ようと決めていた。そして現に、あいつは翌日もまた現れた。そのまた翌日も現れた。いつも決まって同じ格好だった。そうしてあいつと出会って四日目のその日、土曜日を明日に控えた金曜日、俺はあいつと二人、ベンチに並んでおにぎりを頬張りながら、家から持ってきていた「それ」をどのタイミングで出してやろうかと考えていた。

「お前、学校は？」

あいつが唐突にそんなことを聞いてきたのは、いよいよおにぎりも食べ終わり、こいつのことだからきつと飛び跳ねて喜ぶだろうと胸をわくわくさせて他には何も入れてこなかったランドセルからそれを取り出そうとした、まさにその時だった。

俺は一瞬、戸惑った。直後に、ほんの少し、裏切られた気分になった。こいつは、こいつだけはそんな話をしてこないと、勝手に思っていたからだ。だって、それくらい俺は二人の時間が楽しかったし、これからもずっと二人でいられば良いと思っていた。

なのにあいつは応えようとしない俺に向かって、「お前、学校に行っていないのか」。そっちこそ、と思ったものの、俺は言えなかった。だから代わりに「こっちの方が楽しいから」と返した。言つてから、お前というのが楽しいと、そう言えば良かったと思った。するとあいつは、今度は「友達は？」と聞いてきた。「いないのか？」と。

今度こそ俺ははつきりと裏切られたと思った。お前がそうじゃないのかよ、反射的にそう怒鳴りかけた。

だけど、やっぱりあの頃にはそんな勇氣も、或いは鈍感さも無くて、結局、抵抗するようにはばらく沈黙を貫いた末にいたたまれなくなつてぽつりと答えた、「そんなの、いないよ」と。言つた直後、自分の口から発したくせに、ずきりと胸が痛くなった。あいつがどんな顔をしているのか、とても見られなかった。

「どうして作らないんだ」

あいつからの問いかけは容赦なく続いた。

「そんなの、無理だからだよ」

「何が無理なんだよ。簡単だよ」

「簡単なんかじゃないよ」

「何でだ。自分から話し掛ければ良いだろ」

「だから、そんなことをしたつて無理なんだつて」

言いながら、どうして分かってくれないんだよと憎らしくさえなつた。そしてそんな感情の勢いに任せてあいつを見ると、あいつは真っ直ぐにこちらを見てきていた。だから俺は反対に自分の方が気まずくなくなつて、すつと視線を逸らして言い訳した。「ここの子供がどんな話を好きなのか知らないし、第一、そんな気軽に話を出来るほど仲良くないし」。

数秒後、あいつの方から呆れた風のため息を吐く音が聞こえてきた。その瞬間、俺は自分でもわけが分からなくなつて、自覚した時にはもうすでにそれを声に載せていた。

「お前がいるから、他の奴なんてどうでも良いんだよ」

果たして、あいつはそんな俺に向かってたつた一言、「お前は本当にフクバクだなあ」。きつと俺は怒つても良かった。実際、腹の中ではどうしてこんな時にそんなことを言う

んだよと憤っていた。

だけど、その時のその声があんまりにもあっけらかんとしたものだ。俺は何も言えずにあいつを見た。

あいつは笑っていた、いつも通り嬉しそうに、いや、それよりも少しだけ誇らしそうに。

「自分から話し掛ければ仲良くなれる。簡単だって」

「だから、さっきから言ってるだろ」

「出来る」

「無理だって」

「いや、出来る」

「あのさ、何でそんなこと分かるんだよ。超能力者でもないくせに」

それは俺にとって、と言うよりも少なくとも当時の俺の周りにいた子供にとって決定的な言い方だった。超能力者でもなくせに出来るわけないだろ。そう言えば大抵の場合、相手は納得したし、そうでなくとも否定の言葉を続けられなくなった。いや、続けられなくなるはずだった。

それなのに、あろうことかあいつと来たら。

「だってこうして喋ってるだろ」

そんな嫌みなんで欠片も理解していない口ぶりで、きわめて平然とそう言った。「俺たちが友達だって、お前が言っただろ」。

全くもって何て奴だと呆れた。しかもそれが計算でも何でもなくて本当に自然に言ってる。そうだったから余計に馬鹿馬鹿しくなった。だから俺はさっさと話題を変えることにした。そうしないと低学年の児童みたいに泣き出してしまいそうだった。

「これ」と言ってランドセルから取り出した白いスニーカーを見せると、あいつはでっかい声で「すげー。ぴかぴかだな」と言った。それはまだこちらへ引越してくるずっと前、父親と二人で出かけた時に買ってもらったスニーカーだった。ちよつと見栄を張ったせいでぴつたりになるにはまだもう少ししばらく掛かりそうだったそれは、生まれて初めての紐靴で、白い平紐をきゅつと蝶々結びにするともう凄く大人になった感じがした。

「これ、上げるよ」

俺はそれをあいつの胸元へ差し出した。

でも、あいつは最初、受け取らなかった。てっきり大喜びしてこっちの手から奪い取っていくかと思っていたのに、と言うよりそれくらいしてもらわないとこっちもせつかく上げるんだからと思っていたのに、何だか妙に困った風に「いや、でも」とか何とかぶつぶつと。

「どうして？要らないの？」

気に入らない、なんてことは絶対に無いと確信していた。だってこんなにも格好良い靴なんだから、そんなはず無いと。

するとややあってから、あいつはぼそりと、「だって、それ、お前の大事なもんだろ」。

俺は不思議だった。どうしてそれが俺にとって大事な物だと分かったのだろうか、だって単なる余り物を持ってきた可能性だってあったのにと、不思議に思った。そしてそれ以上に、嬉しかった。やっぱり気に入らなかつたんじゃないかと、本当は嬉しいくせに遠慮しているだけなんだと思つたら、もうそれだけで十分だった。

「僕にはちよつと大きすぎるんだ。でも、そつちなら履けそうだし」

だから俺は改めて言った。「これ、上げるよ」と。

果たして、今度こそあいつは俺の手からそれをひったくるようにして取っていき、素足に履いていたぼろぼろの運動靴を靴飛ばしの要領でぽーんと飛ばして、新しい靴と履き替えて、それからぎこちない手つきで出鱈目に紐を結んで「どうだっ?」。

ぴったりだった。足の先まで日に焼けたその体に、真っ白いスニーカーは文句ないくらい格好良く似合っていた。悔しいけれど、間違いなく自分が使うよりも良いと思った。

あいつは最初の方こそ、白い靴に汚れが付いてしまうのを恐れておっかなびっくりという感じで歩いていたものの、やがて試しに地球儀を回してみた途端、どうやら今まで以上に地面を上手く蹴れると気付いたらしく、そうなる earliest こつちが手のつけようのないくらい文字通り跳んだり跳ねたりした。その日に乗った地球儀はもしかしたら遊園地のジェットコースターよりも凄かった。

「明日は、学校に行けよ」

夕方、こちらが「また明日」と言うより先に、あいつがそう言ってきた。俺はほんの束の間、何と応えて良いものか迷ったけれど、やがて「うん」と頷いた。真っ白だったスニーカーは、少し汚れるたびにあいつが自分の甚兵衛の裾で綺麗に磨いていたおかげで、あんなに動き回っていたにも関わらずきらきらと光って見えた。

翌日、土曜日。俺は少なからず不安を抱きつつも、あいつとの約束通り、集団登校こそしなかったがちゃんと朝から学校へ行った。どうせ昼までで終わるから、そうしたらさつさと帰れば良い、途中何度も何度もそんな考えで自分を励まして歩いた。教室へ着くと、クラスメイトは一瞬、びっくりした風に動きを止めて、それから何となくよそよそしい感じになった。話し掛けてくる生徒はいなかった。

幸いにして転校してきた時であてがわれた席はそのまま、俺は無言で足早にそこへと座った。それから朝礼が始まるまでずっとそこから動かなかった。担任教師は久しぶりに登校してきた俺を見て、一言「お、今日は来たな」と言っただけだった。

一時間目は国語だった。当然、教科書の何処をやっているのか分からなかった。でも授業を聞きながらページをばらばらとめくる内に担任の読んでいる場所を見つけられたから問題なかった。二時間目は算数で、それもやっぱり一時間目と同じだった。

そうして遂に三時間目がやって来た。休み時間にするのになかった俺は授業の始まる前から道徳の教科書を机の上に出していた。だけど担任は教室に入ってくるやいなや、こつちをちらりと見てから「今日は特別に外でドッジボールでもするか」と言い出した。

正直、嫌だな、と思った。ただでさえそれほど運動神経が良くないのに、ましてやドッジボールなんて痛いだけで楽しくないこと、出来ればやりたくなかった。でも、そんなこちらとは対照的にクラスの大半は一斉に歓喜の声を上げていた。そしてみんなはそのまま校庭へと駆け出した。

校庭ではすでに五年生が体操着姿でサッカーをしていたが、広さにはまだまだ十分な余裕があったので、俺たちはクラスを四つに分けてトーナメント戦を行うことになった。そして担任は、「チーム分けはお前達で決めろ」と言った。

途端にわらわらと生徒達が動き回り、がやがやとあちこちで相談が始まり、だけど俺はその真ん中でぼつねんと取り残されていた。何人か、視界の隅でこちらを気にしている風

な様子の生徒もいたが、それでも率先して話し掛けてくる人間はいなかった。担任もまた声を掛けてこなかった。俺はどうしようか途方に暮れた。そうする内に徐々にチームが出来上がっていった。そうして遂に、俺が最後の一人として残った。まるでサイコロの五の目よろしく俺の周りに四つのチームがいた。

誰しもが牽制している感じがした。さながら四角形でも作るみたいに、チーム同士で「お前が行けよ」みたいな視線が飛び交っていた。俺は恥ずかしさのあまりいつしか俯いてしまっていた。

お前は本当にフクバくだなあ。

そんな声が聞こえた気がしたのは、その時だった。

はっとして顔を上げると、当然ながらあいづはそこにいなくて、代わりにクラスでもやや大柄な男子がこちらへ近付こうとしていた瞬間だった。突然にこちらが顔を上げて驚いたのか、彼は目を丸くして足を止めていた。

「あのさ」と、だから俺は自分から一歩近付いた。心臓は信じられないくらいに早く動いていた。五十メートル走を百回くらいした後みたい足はがくがくだった。

「チームに入れてよ」

だけどその声は、自分でも驚くくらいはつきりと言えた。きよとんとしていた男子の顔が、ほっとしたようなものに変わり、それからにやっと笑った。「んじや、こつち来いよ」。彼の言葉がきっかけになって、他の生徒も口々に思い思いの話を始めた。その内の何人かは「お前、ちびだから上手く避けれそうだな」とか「当たっても外から当て返したら戻れるから」とか、からかいとも励ましとも付かない感じで声を掛けてきた。「絶対に勝つからな」と、最初に近付いてきた男子が誰よりも元気な声で言った。

結局、俺は一試合目は開始早々にボールを太ももに当てられてコートの外へ出た。けど何度かチャンスを生み出すパスも出来た。そして二試合目の決勝戦では、最初に中から一人、それから当てられて外に出たものの、またそこで一人当てて代わりに中へ戻り、それから最後の一人になるまで中で避けまくった。悲しいかな、最後に残ったのが俺ではもう逆転の望みも薄く、現に遠からず試合は決したが、それでも器用に体を回転させたりくの字にしたりして飛び交うボールを避けるたびに歓声が沸いていた。ろくに名前も知らないクラスメイトばかりなのに、不思議ともう緊張はせず、彼らめがけてボールを投げる時に躊躇もしなかった。

「お前、キーパー出来るか？」

男子生徒の一人がそう聞いてきたのは、三時間が終わって帰りの支度をしている時だった。

「いや、分かんないけど…」

俺は僅かに戸惑いつつも、すぐにそう返した。すると彼は「まあ、とりあえずやってみろよ」と言って、それから「いったん帰って飯食ったら、またダッシュでグラウンドに集合な」と続けてきた。「急がないと六年とかがゴールを占領するからな」。

それが要するに遊びの誘いだと理解するまで、若干の時間が掛かった。だけど理解してから返事するまでに時間は掛からなかった。我ながら現金なもので、集団下校でみんな一緒に歩く間もとにかく急がないと思っていた。

家に帰ってランドセルを放り投げ、レトルトのカレーの〈中辛〉を棚から出して、炊飯

器のご飯を皿に盛ろう：とした時に、はたと気付いた。そしてどうしようと思った。でも、考えている時間はあまりなかった。そこで俺はカレーを再び棚にしまうと、手早く両手に塩を付けてご飯を丸めてラップにくるみ、家を飛び出した。

公園には、誰もいなかった。時刻はすでに普段にあいつが現れる頃を過ぎていた。そして俺は、少しだけ後ろめたい気がしつつも、五分と待たず学校へと駆け出した。

俺が到着した時、校庭にはまだ誰もいなくて、一番大きなサッカーゴールも無人のままだった。そこで俺は仕方なく、走っている最中にまん丸から俵型になっていたおにぎりを食べながら級友を待った。途中、見るからに学年が上の生徒が何人か校庭にやって来てこちらを見てきたけれど、それ以上は近付いて来ずにさっさとやや離れた場所にある小さなゴールを使ってサッカーを始めた。級友達がやって来たのはそれからしばらく後のことで、彼らは誰よりも先に来ていた俺に感心し、さらに俺がおにぎりを作ってきてその場で昼飯にしていたと知るとさらに盛り上がって、「お前、すごいな」と口々に言ってきた。「これから俺らもそうしようぜ。そうすればいつも一番先に来れるし」と語る級友達は、さながら金脈でも掘り当てたトレジャーハンターみたいに興奮していた。おかげで俺はいとも容易く大量失点を許してしまうようなへぼキーパーであるにも関わらず、誰からも一度も責められたりしなかったどころか、翌日の日曜日にも彼らの遊びに参加して朝からキーパーを務めることになった。そして俺はこの日を境に、学校を休まなくなった。

意識の片隅にはいつもあいつの存在があった。でもその一方で、急速に親しくなれた級友達との関係がそれと同等に、ともすればそれ以上に大きくなっていった。それにまた、やはり彼らは皆、気の良い連中ばかりだった。だからこそ、学校が終わって帰り際に、はたまた遊んだ後の別れ際に「また明日な」と言われると、どうしても前のように学校をサボったりすることが出来なかった。すると必然的に、朝から公園へ行くことが出来なくなっていた。例えば学校から帰ってきてからや、土日に級友らと会う前などには公園へ何度も何度も足を運んだけれど、あいつと会えることは一度もなかった。そうしていつしか、俺は「あいつはあいつで忙しいんだ」と勝手な言い訳をするようになり、やがてそれさえもせずにそもそも公園へ行かなくなった。級友達は誰一人として真つ赤な麦わら帽に群青色の甚兵衛姿の子供なんて知らず、また他の学年にもそんな人間はいなかった。

俺が再びあいつの姿を見つけたのは、もうじき残暑もなくなるうとしていた、ある晴れた日曜日の昼だった。その日、俺は初めてクラスの中でも特に親しい男子連中を我が家へ招待する為に、学校で待ち合わせしてから彼らを引き連れて再び自分のアパートへと歩いていた。ふと、ついでに例の公園の前でも通ってみようかと考えたのは、単なる気まぐれだった。まさかあいつがいるなんて欠片も考えていなかった。だけどいよいよ俺たちがその前を通り過ぎようとした時、俺は確かに赤い地球儀の中にそれよりも尚鮮やかな麦わら帽子を見つけた。

思わず走り寄ろうとした。だけど、三歩も行かずに足が止まった。背後から「どうした」と級友らの声がした。数秒間の逡巡の末に、俺は短く「ちょっと待ってて」と彼らに告げ、今度こそ公園の中へと入っていった。ただし、その歩みはきつとももの凄く遅かった。

「やあ」と地球儀の外から声を掛けたのは俺だった。あいつはそれに地球儀の中から「よお」と返してきた。すぐ側で話しているにも関わらず、あたかもスペースシャトルに乗っている相手と地上から電波で会話しているみたいなきな気分だった。あいつは相変わらずの格

好で、ただその足下だけは出鱈目に紐を結ばれたスニーカーだった。スニーカーはまだまだ白くて綺麗だったけれど、それでも上げた時よりはずいぶんとその足に馴染んでいる風に見えた。

「あ、元気だった？」

自分から話し掛けたくせにどんな会話をすれば良いのか分からず、俺は結局、自分でも卑屈だと知った上で、ことさらに笑顔を意識してそんなことを言った。対してあいつはそんな俺を一瞥するやいなやさっさと顔を逸らし、「あいつらは？」と言ってきた。それはおそらく、決して怒っていたり警戒していたりするような口調でなかったはずだった。だけれどあの時の俺は、そうでなければきつとおかしいんだと、今にして思えばそれこそ身勝手な思い込みを通して親友の声を聞いてしまっていた。

：そう、親友だった。そのはずだった。少なくとも、ちよつと前までは確かにそうだった。だから、もしもそうでなくなっていたとすれば、それは間違いなく自分がここへ来なくなつてからだと思つた。「あ、あの子らは、学校の友達」。気付けば俺はまともにあいつの顔を見ることも出来ず、地球儀の縁と地面の境目を視線でなぞるように、ひたすら俯いたままで声を絞り出していた。

「友達、出来たんだな」

「うん。あ、それで、今から、うちに行くことになつてて」

「へえ」

「あ、紹介するよ。だから――」

――一緒に行こうよ、そう言うつもりだった。そうしたらあいつのことだから、あっさりと頷いて付いてくると：いや、そうなれば良いと思つた。

けれど、あいつの答えはあまりにも短い「いい」。

俺は続きの言葉を失つた。それどころか口を開けば今にも泣き出しそうだった。

「お前はクーチマーだ」

しばらくして耳に届いてきたのは、またしても意味の分からない単語だった。

でも、俺には何となく、その言葉を理解することが出来た。したくなかつたのに、してしまつた。だからこそ、俺にはやっぱりあいつの顔を見られなかつた。あいつはきつと、お前は裏切り者だ、そう言つた。

「おーい」

と背後から級友の声が聞こえてきた。「何してんだよ」と、その声はいつもと変わらぬ響きをしていた。そこでようやく俺は顔を上げられた。けれどやっぱり、俺は最後まであいつの顔を見られなかつた。

何故なら地球儀の中にはもう誰もおらず。また、それきり、俺が再びあいつの姿を見られる日はただの一度として訪れなかつた。

○

「つて言うことが昔あってさ。結局、俺の小学校だけじゃなく、周りの子供がみんな集ま

ってくる中学校に入ってから一回もあいつを見つけれなかったんだけど。これって、ちよつと不思議でしょ」

そう締めくくってテールを囲む面々を見渡すと、やがて返ってきた反応は「えー、嘘でしょー」やら「ちよつと作り過ぎよねー」やら「私は意外と嫌いじゃないけどね」やら。なるほど、他の男どもには悪いが今日の合コンはそれほど気合いを入れなくて良いな、と早々に判断する。要するに、これが俺にとって手っ取り早く初対面の女の脈の有り無しを見分ける手段だったからだ。信じる信じないとか、不思議に思うとか思わないじゃない、少しくでもイケそうな女ならとりあえず興味ある風を装ってくる。だとすれば三人目の女などはやや狙い目なのだが、いかんせん男側の幹事でもある友人の彼女だった。

そして俺は目の前に置いていた携帯電話を手にとってメールを確認する振りをしつつ、数分後に着信音が鳴るようタイマーをセットした。今回の集まりに関してはどうせ元からそれほど乗り気でなかったのだし、そろそろ適当な理由を付けて抜けるのも良いと考えたからだ。

だけど、そんな俺に思いも寄らぬ形で声を掛けてきたのは、それまでずっと黙ってこちらの話聞いていた四人目の女だった。

「私、思うんだけど。それってさ、本当に『裏切り者』って意味だったのかな」

見るからに派手な顔立ちで、さらには化粧も厚めで、髪は当然なのか明るく染められていた上にパーマまで当てられていて、初めて会うやいなや早々に「こいつだけは無いな」と俺の中で選択肢から除外されていた女は、けれど他の誰よりも真面目な様子でこちらへと視線を向けてきていた。

「いや、そりゃそうでしょ」と言いながら、何だこの女と思った。多分、露骨に表情にも表れていた。

だけど、それなのに女は一向に怯む気配を見せないどころか、さらに「妖精でも単なる年季の入った不登校児でもどっちでも良いけどさ、何となく、私は違う気がするんだけど」。

いよいよ変な奴だと呆れた。正直、こっちこそそんな話はどうだって良いのだ。あの話はいくまでも単なる心理テストの延長みたいなもので、今更あの時のあいつがどんな風に思っていたのかなんて、確かめようと思わないし、そもそも確かめる術もない。いや、確かめるまでもない。だって現に、俺はあいつを裏切ったのだ。紛れもなく孤独を癒してくれたはずの相手を、別の友人が出来たからと、あたかも使い捨てのカイロのごとく。

「まあまあ、良いじゃん別に、そんなこと。それよりさ」

俺はとにかく話題を変えようとつてつけたような口上を述べた。どうせもうじき携帯電話が鳴る。そうすればそれを言い訳にして店を出れば良い。五千円も置いていけば十分だろう。全くもって赤字だが、それでもう今夜のことは綺麗さっぱり忘れてやる。そう、俺が考えてやっているのに。

「良くないよ。だって、大事なことじゃん」

いい加減にしろよお前、と思わず言いそうになった。お前に何が分かるんだよと、苛々が募ってきた。周囲も俺たちの間に流れる空気を敏感に察知し、やや気まずい感じになっていた。だからもう、本当に、俺だけでなくみんなの為にも、お前は黙れと言いたい気持ちを含めて、「ごめん。変な話しちゃったよね。けどさ、マジでそんな大したあれじゃないから」。

「そりや、そんな風に考えてれば、あなただけは楽だろうけどさ」  
「何なんだよさつきから」

こちらの言葉を遮ってまで放たれた否定に、気付けば俺はそう言っていた。これももしも男相手であったなら殴りかかるまで行かずとも胸ぐらを掴むくらいはしていただろう。

「関係ないでしょ、おたくにはさ」

「そりや、そうだけど。でもさ、可哀想じゃん」

「ああ、そうですね。あいつには可哀想なことをしたよ。そんなことな、改めてそっちに言われなくたって」

「そうじゃなくてさ」

と、そこで唐突に女の顔が変化した。その表情は、苛立っている風な、だけでもしも最初から彼女を好意的な目で見ていたとすれば、それはもしかしたら上手く言いたいことを伝えられなくてもどかしさを感じているような、そんなもので。

「お互いにさ、こう言うのって、誤解したままとかって、辛いじゃん」

直後、携帯電話の画面が明るくなり、続けて設定していた音が鳴り出すよりも早く、俺の手がボタンを押して音を止めた。

「友達だったなら、余計にさ」

端的に言えば、この話はいわゆるお遊び感覚の診断ゲームだった。信じる信じないとか、不思議に思うとか思わないとかに関係なく、少しでも好感触の女であればとりあえず向こうも適当に話を合わせて乗ってくる振りをする。そして実際、自惚れでも何でもなく、これまでにもそんな女は大勢いた。

だけど、と俺は思った。この時みたいに、あんなにも悲しそうに、いつそ哀れんでいるような表情を浮かべながら、そんなことを言ってきた相手は、間違いなく初めてだった。

どう見たって俺以上に遊んでいそうな女で、頭も尻も軽そうな女で、絶対に付き合いたいなんて思えそうになかったのに。

まさか、三年後、この女が自分の嫁になるだなんて、それこそが何よりも不思議で信じられそうになかった話だった。

○

ようやく支えなしで歩けるようになったばかりの我が子と妻を連れて十六年ぶりに訪れたそこは、あの頃と異なり、シーソーも地球儀もベンチすらもなくなって、もう古びた鉄棒と座る部分の木が割れたブランコがあるだけだったけれど、それでも確かに公園として存在していた。

背後で妻がその外見の印象そのままに初めて大都会のど真ん中にやって来た田舎者よろしく声を上げている。へーとかほーとかへーとかほーとか、最初の内こそ可愛らしいと思えたものの、それもやがてはお前はフクロウかと言いたくなる原因になってきて、だから俺は「あのな」と漏らしつつ振り返り、けれど言葉を途中で止めた。

妻と俺とのちょうど真ん中くらいで、青と黄色が可愛らしい幼児靴を履いた息子が一人

で立ち、何が楽しいのか満面の笑みを浮かべてじーっと公園の一角を見つめていた。そこは、かつてあの赤い地球儀が設置されていたはずの場所だった。

まさか、と我ながら馬鹿げていると呆れてしまう。そんなことあるはずがないのにと、一瞬でもそんな風に考えた己に対して笑ってしまふ。そして俺は我が子を抱き上げ、改めてそんなわけないと証明しようとする。だけど、幼子はそんなこちらの思惑なんてまるでつもらないとばかりに、自身を掴まえようとした手を振り払い、それから視線ごと体を回してぐるぐるぐるぐる公園の真ん中で奇妙な踊りを踊り出す。

そんなわけがない。そんなことあり得ない。何度も自分に言い聞かせた。だって、俺にはもう何も見えなかったから。どれだけ息子の視線を追いかけてみても赤い影一つ見えなかったから。だったらあいつは最初からそこにいないと諦める方が遙かに楽だった。

だけど、もしも、それでも万が一、億に一、兆に一、喩え単なる夢や幻みみたいな存在であつたとしても、せめて今だけはそこにあいつがいるとして、しかも何か一つでも構わない、あのおにぎりの味や白いスニーカーの履き心地や二人で一緒に回した地球儀のひんやりとした感触のどれか一つでも、今でも覚えていてくれたのだとしたら。

きやつきやと笑う声が響く。妻がのんびりした声で「こけないでねー」と息子に言う。風もないのにブランコが揺れてきいと鳴る。そして俺は静かに息を吸い込んで、「俺たちはクーチマーだ」と、少し湿った声でそう言った。

〈了〉